

美術史的な観点にとどまらない理論的な聖像画論や聖像画破壊運動についての踏み込んだ日本語による著作はまだない。そのような状況の中に、若林氏がイスラームに近い観点から、アラブ系の東方キリスト教神学者がこの問題をいかように扱ったかという興味ある書物を著されたことは、この分野の研究を開拓するものである。本書は本論の約3分の1弱が翻訳で、本論は、上述のような現状の性質上、背景となる歴史や知的風土の叙述に多少傾いているが、今後、可能なら、理論面を主とした著作を望みたいところである。

## 蘭 田 坦 著『クザーヌスと近世哲学』

創文社，2003年，258＋7頁

八 卷 和 彦

本書は、永くクザーヌス哲学の研究に携わり、現在、日本クザーヌス学会会長を務める著者の手になる、斯界待望の新たなクザーヌス研究書である。先ず本書の構成を紹介する。

- 第一章 近世的思考の原点——クザーヌスの「ドクタ・イグノランチア」をめぐる——
- 第二章 クザーヌスと「無限」の問題
- 第三章 近世哲学における神の問題——クザーヌスからカントへ——
- 第四章 クザーヌスにおける Idiota の立場と〈ことば〉
- 第五章 ルネサンス的人間観の成立と意義
- 第六章 宗教における多元性と普遍性——N・クザーヌスの『信仰の平安』をめぐる——
- 第七章 〈aenigmatica scientia〉について——後期クザーヌスにおける知の問題——
- 第八章 〈non—aliud〉について——後期クザーヌスにおける神の問題——
- 第九章 近世初頭における自然哲学と自然科学

第十章 ルネサンスの自然観について——N・クザーヌスからJ・ペーメへ——  
第十一章 〈神〉なき神の探求

以上の全11章を著者は三部に分けているが、それは以下のような視点からである。第一部（第一章から第三章）は、「クザーヌスにおける、近世哲学あるいは近世的思考の原点、原理となり得るような問題点を、主として論じようとした部分である」。第二部（第四章から第八章）は、「クザーヌスの生涯のほぼ中期から後期に書かれた諸著作のうちからいくつかを取り出し、それらに含まれている彼独自の思想や問題を考察し、論述したものを集めた」。第三部（第九章から第十一章）は、「ほぼクザーヌスの生存した時代の、つまりいわゆるルネサンスまたは近世初頭と呼ばれ得る時代の、広い意味での思想的背景や思想問題に関わる論考を集めた」（序、iii頁）。

以下で評者は、各章の個別的内容に立ち入ることはさし控えて、その内容を踏まえつつも、むしろこの書物に展開されている著者の思惟の特質と独自の貢献について論じることにはしたい。

先ず特筆すべきことは、著者がいわゆる「定説」とか「前提」に対して、自ら積極的に問いかけ、その再吟味を遂行していることである。この問い直しは、例えばクザーヌス等思想家自身のそれにも向けられるし、解釈者たちの解釈にも向けられる。しかし著者はそれを大仰な表現をもって遂行することがないので、読者は時にそれを見過すかもしれない。一二、例を挙げてみよう。クザーヌスの「ドクタ・イグノランチア」の立場で主張されている「精確な真理は把握され得ない」という命題について、著者は「ただ論理的・客観的な命題として語ったということだけではなくて、そういうふうに語るとき、そのクザーヌス自身の自覚において何が現われているのか、そしてそのなかに前進の原理なり、思惟を駆り立てる可能性があるとするれば、それはいかなることなのか、そういう視点から、自覚そのものをもう少し具に見てみる必要があると思われます。このような事態は、実際にはクザーヌス自身もそれほど言葉を尽くして説明しているわけではありません」（22頁）。クザーヌスにとって自明なことであつたからか、あるいは論理的帰結だけで満足してしまったからなのかは不明だが、まったくこの指摘のとおりである。この認識に立って遂行されている著者の思惟は十分に深い。

もう一つの例は、ルネサンスにまつわる定説への問い直しである。『世界と人間の

発見』がいかにして、またなにゆえ起こり得たのか、……、とりわけ、思想的および文化的な連関において、それはどのような背景のうちから、いかなる経過において生じたのか、……さらに直載に、ここで世界の発見と人間の発見とがなにゆえに一つに結びつき、どのように関連しているのか」(98 頁。同様な問いかけは 182 頁にも) という点に関して、著者は冷静に吟味の眼差しを向けているのである。この視線が、第五章、第九章、第十章の考察の深みを増し加えている。

第二に特筆すべき点は、著者が〈無限〉の問題についてたゆまぬ思考を展開していることである。これは、「クザーヌスと「無限」の問題」という表題をもつ第二章のみならず、本書における通奏低音ともなっている。そればかりか、同じ著者の前著『〈無限〉の思惟』(1987 年) 以来の連続的思索の結果でもあるだろう。クザーヌスの思想の価値を、とりわけ近世との関係で見出す場合には、彼の〈無限〉についての思索は、19 世紀におけるクザーヌス再発見以来、注目されてきている点であるから、著者のこの姿勢は至当なものである。

〈無限〉問題に関する著者の思索の特色を評者なりに整理するならば、存在論における〈無限〉と認識論における〈無限〉とが互いに相関構造を有することが指摘されている点にある、とすることができる。すなわち、クザーヌスの定義によるものとしての、神である「否定的無限」と世界である「欠如的無限」の区別を前提にした上で、後者を前者の「似姿」(写し) と存在論的にとらえる。さらには、そこに「世界をいわば外から見る視点が成り立っている」ことを指摘すると同時に、「世界をいわば内から見る視点」として世界内の無際限性をも指摘する。こうして、「世界を外からと、世界の内からという二重の視点が含まれ、しかもそれらが重なり合って無限性を思惟する立場が形成されている」と論じて、著者は認識論的な〈無限〉の問題をも同時に指摘するのである(58 頁以下および 237 頁)。

するとここには、存在における〈無限〉(神) と〈無際限〉(世界) との関係と相関的に、認識の〈無限〉(神の認識) と〈無際限〉(人間の認識) との関係が浮び上がってくることになる。それゆえに著者は、「クザーヌスの無限の探求は、無限なる真理に到達するものではない」(38 頁) のであり、「それはいわば漸近線のように限りなく接近する(無限接近) ということで」ある(236 頁) とする。しかし、同時に、「その無限なる探求自体が、実はそのまま神の現われだということが最終的に言われ

てくることにもなる」とも指摘する（237頁、38頁にも同様の指摘がある）。

この最後の「人間の無限なる探求」を可能とする根拠を著者は、「人間のもつ精神的な能力の無限性ということから考えられる」（237頁）（この表現には評者は疑問なしとしないが）とするゆえに、クザーヌスの思想を近世哲学との関連でとらえる視点が著者によって採られるに到るのは当然の帰結であり、それがこの書物のタイトルにも表われているのである。

この点について著者は、例えば以下のようなまとめ方をしている。「このような精神の活動性と能動性の内実を、クザーヌスはきわめて包括的かつ多面的に考えており、ある意味ではそれ以後（すなわちルネサンスおよび近世）における精神の諸展開の可能性をそこに先取りしていると見ることもできる」としつつ、第一に、このような認識の活動は、「のちに、近世における哲学的認識や科学的知の立場として確立されていくものの原理ないし萌芽とみなされてよい」ととらえ、第二には、「ルネサンスおよび近世を特徴づける科学や技術における物の製作・産出の原理的な可能性が、クザーヌスの精神のうちで見出される」とする。第三には、「ルネサンス的文化、とりわけ芸術的活動の創造的源泉も、クザーヌスの精神の活動性と創造性を前提として、初めて十分に理解可能となるであろう」とする（106頁）。なお、近世哲学との関連では第一章において、「ドクタ・イグノランチア」およびこれと密接な関係にあると著者が正当に把握している「臆測」の思想がカントの理性の思想と対比されてもいる（35頁以下）。

第四に言及しておきたい点は、著者の前著『〈無限〉の思惟』で「『今後の課題として』と述べた」（本書の序）と記されている、クザーヌスの中期から後期に書かれた諸著作の考察が、本書第二部で遂行されていることである。具体的に扱われている著作は、『Idiota 篇』、『信仰の平安』（De pace fidei）、『緑柱石』（De beryllo）、『非他者』（De non aliud）等であり、それぞれが第四章から第八章において綿密に考察されている。これらの論考を展開するにあたり著者は、クザーヌスの思惟の関心と視線の方向の変化を以下のように正当に指摘している。「少なくとも前期との対比で言えば、いわゆる中期においてその関心と視線はいわばより外に向かって開かれ、その主題への焦点の合わせ方はやはり少し変わってきていることは否めない」が、「後

期あるいは晩期と言いうる時期になると、……再び彼の中心的な関心は神の問題へと立ち遷]っている (164 頁)。

そのなかでも著者はとりわけ〈non aliud〉という神概念とそれをめぐるクザーヌスの思索を、「前期からの彼の哲学的思考の進展と深化がいわば結晶化した形で表わし出されているとともに、彼の思想の究極的とも言うべき境地が独自の仕方でも語り出されている」(165 頁)ものとしてとらえた上で考察する。その際に著者は冷静にも、この『非他者』におけるクザーヌス自身の、ある意味で極めて図式的でさえある思考にからめとられることなく、その含意するものの豊かさを十分に汲みとっている。しかし紙幅の関係から、ここでは著者の論考の到達点である、いわば「場としての神」論を紹介するにとどめる。著者は以下のように指摘する。「神があらゆるものと別ではなく、あらゆるものにとって「他ならざるもの」として見られる。……ここでは、あらゆるものが、従って個々のものがそのものとして見られながら (天は天に他ならないものでありながら)、しかもいわばそのうちに、そのものに即して、神が見出され、捉えられる (神は天にとって他ではない、あるいは天と異なるものではない) ことになる。……ここでの他なるものと非-他なるものとの関係は、もはやいかなる意味でも写しと原型の関係ではないであろう。……それは、単なる神の顕現 (Epiphany) でもなければ、いわゆる汎神論 (Pantheismus) でもない。むしろ「非-他なるもの」としての神は、そこであらゆるもの (他なるもの) の存在と認識を成り立たしめるもの (場) と言うことができるかも知れない。クザーヌスが「非-他なるもの」を、「現実に無限なる力」(virtus actu infinita) と言うのも、このことを示そうとしているとも考えられよう」(175 頁以下。同様の指摘は 240 頁にも)。

以上のような、著者のたゆまざる思索の成果が豊かに脈打つこの著作が、より多くの読者をもつことを強く期待したい。

---